

新庄市小中一貫教育通信 第46号

令和8年 3月26日 新庄市教育委員会

市内「義務教育学校」の成果を検証しました

本市の義務教育学校である萩野学園が開校してから10年が経過し、明倫学園は5年を迎える節目の年となりました。

このたび、児童生徒・保護者・教職員へのアンケート結果などをもとに、これまでの取組を振り返りました。その中から、主な成果と今後の課題をお知らせします。

1 異学年で育つ「思いやり」と「安心感」

アンケートで特に多く見られたのが、「上級生が下級生にやさしい」「学校があたたかい雰囲気で安心できる」という声でした。

1年生から9年生までが同じ校舎で生活することで、年上の子どもが自然と手本となり、年下の子どもはそれを目標に成長していきます。

- ◆ 上級生は責任感や思いやりが育つ
- ◆ 下級生は安心して学校生活が送れる
- ◆ 人間関係が安定しやすい

このようなよい循環が、学校全体に根づいていることが確認できました。

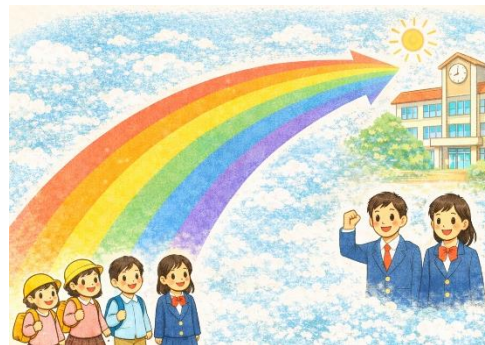


2 9年間つながる安心感 —「中1ギャップ」の解消—

一般的に、小学校から中学校へ進学する際には、環境の変化による戸惑いが起こりやすいと言われます。しかし、本市の義務教育学校では、次のような傾向が見られました。

- ◆ 進学に対する不安が少ない
- ◆ 学年が上がっても環境が大きく変わらないことが安心感へと繋がっている
- ◆ 特定の学年で不登校が増える傾向がない

9年間を見通して指導できる体制が整っていることで、学習面だけでなく、生活や心の面でも大きな段差が生まれにくいことが、改めて確認されました。



3 先生たちの連携によるきめ細かな支援

義務教育学校では、多くの先生が子どもたちに関わります。多く挙げたよさは次のようなものです。

- ◆ 複数の先生で情報を共有できる
- ◆ 困りごとにすぐ対応しやすい
- ◆ 専門性を生かした授業を早い段階から受けられる

保護者からも「相談しやすい」「多くの先生に見守られている安心感がある」という声が寄せられています。

9年間同じ学校だからこそ、子どもの成長を長い目で見守り、支えることができています。



4 これからの課題とさらなる挑戦

成果が見られる一方で、次のような課題や目標も見えてきました。

① 上の学年や将来に向けて高い目標を持つこと

落ち着いた学校生活の中で、より高い目標に挑戦する経験をどう増やしていくかが課題です。義務教育学校では、5年生から「中期ブロック」として中学生のステージにあがります。中期ブロックならではの特色ある教育活動が求められます。

② 学力のさらなる向上

義務教育学校ならではの9年間のつながりを生かした授業の工夫を積み重ねながら、基礎・基本の確実な定着と、学びに向かう力の育成を一層進めていきます。

③ 地域・社会とのつながりの充実

校外に出て、地域の方々と関わりながら学ぶ活動を、より計画的に広げていく必要があります。

④ 義務教育学校のよさの発信

9年間のつながりや工夫が、保護者や地域の皆さまに十分伝わっていない面もあります。取組を分かりやすく発信し続けることが大切です。

今回の検証からは、異学年の関わりや先生同士の連携、9年間のつながりが、学校文化としてしっかり根づいていることが明らかになりました。

これからは、その安定を土台に、「挑戦する力」「地域とともに学ぶ力」「将来を切り拓く力」をさらに育てていきます。

子どもたちの成長を、学校・家庭・地域が一体となって支えていけるよう、今後ともご理解とご協力をお願いいたします。

新庄市の小中一貫教育について、ご意見等ございましたら下記にお寄せ下さい。

新庄市教育委員会

施設設備等のことなど	・ ・	教育総務課	(直通 23 - 5004)
小中一貫教育の内容など	・ ・	学校教育課	(直通 23 - 5003)